第２回次期あいちビジョン有識者懇談会議事録

日時　2019 年１月 29 日（水）
　　午前 10 時から正午まで
場所　愛知県自治センター４階　大会議室

あいさつ

＜野村政策企画局長＞

おはようございます。愛知県の政策企画局長の野村でございます。

本日、第２回の次期あいちビジョン有識者懇談会を開催させていただきましたところ、座長の奥野先生始め６名の先生方全員のご出席を賜ることができました。大変お忙しい中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。また、日頃から愛知県の施策に関しまして、多大なるご理解とご協力を賜っておりますことに、改めてこの場を借りて御礼申し上げます。

さて、本県では、今年度から、次期あいちビジョンの策定に向けて検討を始めているところでございまして、昨年９月２日に、第１回の有識者懇談会を開かせていただきました。そこでは、先生方から、2040 年頃の社会経済の展望とか、愛知の将来の方向性などについて、幅広くご意見をいただいたところでございます。

この次期あいちビジョンですが、愛知のこれからの計画ですとか、愛知の将来をどうしていくかということを決める大変重要なものになってまいります。我々としても、様々なご知見をいただきながら作りたいと思っておりまして、その後、10 月に、それぞれ後藤先生、内田先生、森川先生にご担当いただいている、３つの分科会を開かせていただきまして、その後、12 月から今月にかけて第２回の分科会を開き、３つの分科会がありますので、合計６回の分科会を開いて様々なご意見をいただきました。

そして、市町村とも意見交換会を行いまして、それぞれの地域ごとにどういった課題があって、どういう地域にしていきたいか、ということを、市町村の職員の方とも真摯に議論を重ねてまいりました。また、県庁内で、知事も含めて様々な議論をしまして、本日、この愛知の将来像と政策の方向性の体系イメージを、たたき台として作り上げたというところでございます。

そうした分科会を開くにあたっては、後藤先生、内田先生、森川先生におかれましては、大変お忙しい中、座長として２回の分科会の取りまとめをしていただきまして、改めて御礼申し上げます。ありがとうございます。

本日は、たたき台のイメージを説明させていただきたいと思っておりまして、後ほど、事務局の方から詳しくご説明させていただきます。また、地域別も整理しまして、尾張、西三河、東三河に分けて、３地域ごとの将来像と政策の方向性についての資料もご用意しておりますので、それも含めて先生方には、大所高所からご意見をたくさんいただければありがたいと思っております。

今年秋頃の策定を目指して、我々としても、これからスピードアップして、策定作業を進めていきたいと思っておりますので、どうぞご指導のほどよろしくお願いいたします。

事務局説明

＜事務局＞

企画課主幹の浅田でございます。

それでは、お配りしております資料によりましてご説明を申し上げたいと思います。

まずは資料１、愛知の将来像と政策の方向性の体系イメージでございます。ページの左側、2040 年頃の社会経済の展望ですが、こちらは第１回懇談会でお示ししました将来展望を記載しております。資料の真ん中、愛知の将来像（たたき台）でございますが、第１回の懇談会の資料でお示しをしました９つの愛知の将来の方向性をベースに、有識者の皆様からのご意見等を踏まえまして、愛知の将来像のイメージとして、大きく３つに整理したものでございます。また、ページの右側には、愛知の将来像を実現するために必要な政策の方向性イメージを、10 の項目で整理をしております。

なお、本日の資料は、あくまで検討段階のものでございまして、本懇談会でご検討いただくための材料として、ご用意をしたものでございます。用語としてこなれていない部分や、文言に過不足がある点がございますが、その点ご了承いただければと思います。

それでは、資料１の真ん中、愛知の将来像のイメージについてご説明いたします。１つ目が、「豊かな時間を楽しみながら、すべての人が生涯にわたって活躍できる愛知」でございます。2040 年に向けて社会を構成する主体が多様化する一方、人口減少で地域の担い手が不足する恐れがございます。そうした中で、人格や多様性を尊重しながら、お互いが支え合う仕組みや、意欲や能力に応じて、すべての人が生涯にわたって活躍できる仕組みを作っていく必要がございます。

真ん中の２つ目でございます。「新たな挑戦と未来を拓く創造ができる愛知」でございます。第４次産業革命が進展し、産業構造が大きく変わっていく中で、強みでありますモノづくりの集積を生かし、県民の新たな挑戦を応援し、未来を拓く新たなイノベーションを増やしていく必要がございます。

３つ目が、「世界から選ばれる魅力的で強靭な愛知」でございます。リニアの全線開業によりまして形成されますスーパー・メガリージョンのセンターとしての役割を担うべく、世界中から選ばれ、人・モノ・カネ・情報が集まる魅力的な大都市圏を整備していく必要がございます。こちらの愛知の将来像につきましては、資料２で、詳しく背景等を整理しておりますので、こちらも後ほどご覧をいただければと思います。

次に資料３、愛知の将来像の実現に向けた政策の方向性（たたき台）でございます。この資料は、愛知の将来像を実現するために必要となります 10 の政策の方向性のイメージについて、項目ごとに、その方向性が必要と考える背景・課題や、重点的に取り組むべき政策の方向性を記載したものでございます。

こちらの資料につきましては、これまで２回開催いたしました分科会でのご意見や、分科会委員へのヒアリングでいただきましたアドバイスなどを取り入れながら事務局で作成したものでございます。

まず１ページをご覧ください。「多様性を尊重する社会づくり」でございます。

性別や人種、障害、価値観などの多様性を認め合う社会づくり、学校や地域における外国人に

対する包括的な支援、などをこのテーマで整理しています。分科会で出されました、外国人の子どもたちに対する教員の対応力の向上に関するご意見を踏まえまして、ページ左側２つ目の四角の取組といたしまして、外国人児童生徒の対応にかかる教員向け研修の実施という方向性などを記載しております。

次に２ページをご覧ください。「支え合いの社会づくり」でございます。希望する者が、結婚や出産ができる環境づくり、誰もが安心して、子育てしながら、働き続けることができる環境づくり、などをこのテーマで整理しています。分科会での、ＮＰＯのコーディネート能力の活用に関するご発言を踏まえまして、ページ左側１つ目の四角の取組といたしまして、ＮＰＯなど様々な主体との協働による、地域に合った出産、子育ての支援の検討という方向性などを記載しております。

次に３ページをご覧ください。「生涯にわたって活躍できる社会づくり」でございます。ＡＩやロボットに代替されない人間性を伸ばす教育、個々の能力や適性に応じた教育や多様な学びなどをこのテーマで整理しております。分科会での、教師にとっても魅力ある学校づくりに関するご発言から、ページ右側１つ目の四角の取組といたしまして、同様の方向性などを記載しています。

次に４ページをご覧ください。「豊かな時間を生み出す働き方ができる社会づくり」でございます。人口減少社会への対応としての労働力維持の方策、新技術を活用した新しい働き方の推進、などをこのテーマで整理をしております。分科会での、転居が少ないライフスタイルの構築に関するご発言から、ページ右側１つ目の四角の取り組みとして、希望に合わせた地域限定的な働き方の促進という方向性などを記載しております。

次に５ページをご覧ください。「モノづくりの集積を生かす国際イノベーション都市づくり」でございます。第４次産業革命を生かした、本県製造業の進化、ＣＡＳＥやＭａａＳといった自動車産業の変革の対応などをこのテーマで整理しております。分科会での、デジタル人材の供給に関するご発言から、ページ右側２つ目の四角の取組といたしまして、デジタル人材を確保、育成する体制を構築していく、という方向を、また、農業生産と新技術の融合した地域に、という趣旨のご発言から、ページ右側４つめの四角の取組として、農林水産業における第４次産業革命の新技術の実装を支援し、生産性の向上や流通体制の効率化を図っていく、という方向性などを記載しております。

次に６ページをご覧ください。「世界とつながるグローバルネットワークづくり」でございます。多様化しながら拡大するアジアの活力の取り込み、異文化対応能力が高く世界で活躍できるグローバル人材の育成などをこのテーマで整理しております。

分科会での、インターナショナルスクールや外国人の生活をサポートする社会インフラの充実に関するご発言から、ページ右側１つ目の四角の取組として、同様の方向性を、また、クマーラ委員からいただきました、外国人と地域住民との日常的な交流の必要性に関するご発言から、ページ左側２つ目の四角の取組として、同様の方向性などを記載しております。

次に７ページをご覧ください。「スーパー・メガリージョンのセンターを担う大都市圏づくり」でございます。スーパー・メガリージョンのセンターとなることを見据えた本圏域の拠点性の向上や後背圏の拡大、バランスのよい圏域構造の維持・創造などを、このテーマで整理しておりま

す。分科会での、交通の時間短縮による生産性の向上に関するご発言を踏まえまして、ページ左側１つ目の四角の取組として、中部国際空港から、県内外の主要拠点へのアクセス強化の方向性などを記載し、また、昇委員の東京－名古屋間のリニア中央新幹線開業後、大阪延伸までの間に、西の拠点としての地位を確立すべきというご発言から、こちらにつきましては背景・課題の欄の１つ目の丸におきまして、リニア中央新幹線東京－名古屋間の開業による、社会的、経済的インパクトを最大限活用し、と記載しております。

次に８ページをご覧ください。「都市機能と生活空間を保つスマートな地域づくり」でございます。超高齢社会を見据えたスマートシティの実現、空き家・空き地の活用や、ニュータウンの再生などをこのテーマで整理しています。分科会での、愛知県は交通先進県であるべきというご発言から、ページ右側２つ目の四角の取組として、先進のモビリティの実装などの方向性などを記載しています。

次に９ページをご覧ください。「選ばれる魅力的な地域づくり」でございます。国際的な施設や吸引力のあるイベントの活用、観光面におけるリニア開業効果の活用などをこのテーマで整理をしております。分科会での、観光を考える人材の不足に関するご発言から、ページ右側２つ目の四角の取組として、当地域の観光を支える人材の育成・確保に取り組んでいく、という方向性などを記載しております。

次に 10 ページをご覧ください。「安全・安心で持続可能な地域づくり」でございます。ハード・ソフト両面での防災・減災対策と、被災後の速やかな復興対策、安定的なエネルギー自給と脱炭素社会の実現を最終目標とした再生可能エネルギーの導入と気候変動への適応などをこのテーマで整理をしております。分科会での、防災に関する県民理解の向上に関するご発言から、ページ右側１つ目の四角の取組として、地域防災力の強化という方向性などを記載しております。

次に資料４をご覧ください。地域別の将来像と政策の方向性（たたき台）でございます。県内を、尾張、西三河、東三河の３地域に分けて、地域別の将来像とそれを実現するための政策の方向性を記載したものでございます。なお、政策の方向性につきましては、その地域の社会経済の展望や特性、市町村との意見交換会での意見などをもとに重点的に取り組むべきものについて記載をしています。

まず１ページの尾張地域でございますが、大規模ニュータウン等の人口減少が進行する地域と、都市部など若い人口構造を維持する地域が混在するなど、多様性のある地域特性を考慮し、「多様な人材・産業・主体が垣根を越えて連携・共生・活躍し、活発なイノベーションを創出する地域」とする将来像と政策の方向性をお示しいたしております。

次に２ページをご覧ください。西三河地域でございますが、世界有数の自動車産業が盛んな地域であり、若い人口構造を維持していることなどの地域特性を踏まえまして、「自動車産業から進化を遂げたモビリティ産業の活力を、地域経済や暮らしに波及させながら、愛知の発展をけん引する地域」とする将来像と政策の方向性をお示ししております。

最後に３ページをご覧いただきたいと思います。東三河地域でございますが、県内随一の農業地域でございまして、自然や伝統文化が豊かで、地域内外との連携・交流が活発であることなどの地域特性を踏まえ、「暮らし、自然、文化の豊かさと、地域内外との活発な交流で、地域から

も世界からも愛着を持たれる地域」とする将来像と政策の方向性をお示ししております。

次に資料５をご覧ください。３つの分科会の結果の概要でございます。詳しい説明は割愛させていただきたいと思いますが、分科会で各委員からいただきましたご発言やアドバイスにつきましては、できる限り資料に反映いたしております。

次に資料６をご覧ください。「あいちビジョン 2020 フォローアップ報告書（素案）」でございます。第１回の懇談会で提出いたしましたフォローアップ関連の資料を、今回、報告書の形でまとめたものでございます。

報告書３ページをお開きいただきまして、第１回の懇談会でもご説明をいたしましたが、数値目標につきましては、製造品出荷額等の全国シェアや労働力率など経済関連の項目を中心に、全体として概ね順調に推移していたと考えております。

最後に参考資料、地域別の現状と 2040 年頃の将来展望でございます。地域別の現状と将来展望を整理したものでございまして、地域別の将来像と政策の方向性についてご議論をいただく際の参考にしていただければ幸いでございます。

各委員からのご意見（１巡目）

＜後藤委員＞

私ども県民生活分科会の委員の様々な意見を取り入れていただき、たたき台の中で政策の方向性を強化していただいているかと思います。

「あいちビジョン 2020」の策定時と比べますと、社会経済の展望にありますように、この愛知においても、良くなった面と悪くなった面があります。１つは、情報技術の進展によって、ここにも書いてあるような、働き方とか学び方とかが多様にできるようになったと思います。例えば、私の所属大学の通信学部でも、情報技術を活用することで、本当に多様な世代の人たちが多様な学び方ができるような時代になったと実感しています。また、女性の就労率についてですが、愛知はM字からなかなか変化しないと言われていたのですが、この間、だいぶ台形に近づき、また、女性も多様な働き方が、少しずつではあるけれど、できるようになったと感じています。

一方、生活にとって地域社会が大事だと言われているにもかかわらず、地域活動をしている人や、地域コミュニティのために貢献したいという意欲が、この 10 年、20 年の間に、徐々に低下していることが、様々なデータで把握されております。そういう意味でここに書いてあるように、働き方や学び方の多様化をさらに強化していく方向は重要ですが、共助社会が大事であるにもかかわらず、人々が働く場に出ていって、それによって地域に貢献できる時間がなくなってしまっている、というのは、非常に課題だと思います。

「豊かな時間を楽しみながら」との言葉ですが、前回の時には、「すべての人が輝く」というちょっと理想の方向性だけを示したのですが、ここでは「豊かな時間を楽しみながら」という言葉を添えていただいて、すべての人が生涯にわたって活躍できる愛知の冒頭に加わったのは、とても大事と思います。

それで、様々なデータが示すように、ある程度自由な働き方ができていたり、経済的に安定している人は、地域にも参加できたり、ボランティアにも参加できたり、あるいは、様々な新しい文化活動等に参加できているというところがあります。単にＳＮＳを使うだけで満足してしま

うような方向に流れないような豊かな時間、そして、人生100年時代というのも、若い頃にそういう生き方ができていないと、高齢者になって、いきなり豊かな時間を楽しむというのは無理で、時間だけが余るような状況になってしまいます。この「豊かな時間を楽しみながら」というのは、今後20年のキーワードになって、すべての人が輝くようになればよいなと思います。

多様性が尊重されるということに関してですが、今、ＳＤＧｓが非常に大事になっていて、その中のキーワードでもあります。資料の中にも書いていただいているのですが、愛知県において、外国籍の方とか障害のある方とかに対して、配慮がまだ十分ではないということがあります。多様性が尊重されるということが、教育から始まって、様々な福祉の現場でもそうですし、また働く場でも十分でないと思うのです。そういう意味で、多様性が尊重されるということを、ここにもしっかり書いていただき、豊かな時間、そして、多様性の尊重というので、県民生活の分野のこの１つ目の枠は、そういうふうになっているかと思います。こういうキーワードを入れていただいたことが大変いいことだと思います。

政策の方向性ですけれど、今言ったような「多様性を尊重する社会づくり」では、学校とか地域というようなところで大事だということで、分科会の中には、外国籍の方を積極的に支援されている方も加わってご意見をいただきました。外国籍の方に関しては、これまでも取り組んできましたが、学費など子供の教育問題とか、地域の皆さんの包摂というか、周囲でそういうお子さん達を包み込むようなことは、もちろん大事です。加えて、これからやっていかなければいけないのですが、外国籍の方の高齢化の問題というのが徐々に起こってきている地域もあるので、20年経ったときは、そこをどう考えていくかっていうのも問題で、外国人の方を日本の中に導入しようとしている流れの中で、そういう視点も大事だという意見がございました。

子育てや介護ということが、県民の皆様の一番の不安の項目になっているわけです。そこをしっかり支えていくには、行政も大事ですが、「支え合いの社会づくり」に書いてあるように、地域での取組とＮＰＯなどの活動が大切です。ただ、先ほども言いましたように、データで見ると、実際には担う人達が減っているという課題があります。高齢者の方もちょっと雇用年齢が、働く年齢が伸びてきているというようなことがあります。そして、女性たちも、今までは家庭に居るというように考えていたところの層が、30代、40代の女性層が外に出て行っているということです。そういたしますと地域を実際に誰が担うのか、という話になります。いろいろ地域で活動されている方から、ここはかなり真剣にやっていかなければいけないという発言が強く出ております。

また、「生涯にわたって活躍できる社会づくり」においては、教育やいろんな領域の取組が大事なのですが、その教育を担っている学校の先生が、かなり疲弊されています。また、新しく社会がどんどん変わる中で、先生たちもいろんなことを学んでいくような、そういう機会も大事だというような様々な意見が出ました。私が関わらせていただいた分科会での発言をご紹介させていただきましたが、そのようなことを組み込んで、このような資料が出ているということであります。

ちょっと話が変わりますけど、「安全・安心で持続可能な地域づくり」のところです。県民生活分科会で、地域コミュニティレベルでの安全・安心や、小規模単位の事業所や福祉施設での安全・安心ということも、ぜひ「安全・安心で持続可能な地域づくり」に入れて欲しいというよう

な意見がありました。今日の資料に入れていただいておりましたので、非常にその点はよいと思います。

それから、2040 年頃の社会経済の展望の最後、「災害・犯罪リスクの増大」についてです。この項目の中になかなか入れにくいと思いますが、今問題になっている、新型コロナウイルスのことです。グローバル化が進みますと、感染リスクというのも拡大することを改めて感じているところです。そういたしますと、そういうグローバルな感染リスクが発生した時に、国からの情報だけではなくて、やはり地域、都道府県が情報発信したり、その対応が即座にできたりするように考えておく必要があります。そういうことをやってくと、その地域の魅力にもなります。私どもはこういう計画を作る時、プラスの方のイメージを考えるのですけど、やはりマイナスというか、そういうリスクへの対応ということがあってこそ、選ばれる魅力的な地域につながっていくのではないかと思います。項目出しはしないにしても、政策の方向性の中には、今言ったような感染リスク、グローバルな人と人が行き交う中で、観光にも関係することになりますので、そういうものを入れていただくとよいのではないかと思います。

＜奥野座長＞

「豊かな時間を楽しむ」というのは非常に重要なことだと思いますが、我々の世代は、もっと働け、そうすれば自分も豊かになるし、社会にも貢献できる、ということでやってきたわけです。自分の時間を増やすことが社会に貢献する、としたときに、戸惑いがやっぱりあるだろうと思います、ちょっと時間がかかるかもしれません。

＜後藤委員＞

奥野座長が今おっしゃってくださったように、そのあたりの価値観は、私も一緒で、やはり働くことで社会に貢献したいとか、社会で働くことが自分の生きがいになったりするのですが。若い世代のそのあたりの価値観が変わってきているということで、意識調査をしますと、私たち世代と、20～30 代の意識が、地域活動をめぐっても結構ギャップがあります。ですから、このギャップを埋めていくためにも、豊かな時間とか楽しい時間とか、そういうのがあってこそ参加してもらえる、というところがあります。奥野座長がおっしゃるように、私もつくづく感じておりまして、そこは理解しようと努力はしているのですが、なかなか難しいところがあります。ですから、こう書いていただいて、その世代間のギャップを埋めていくような取組というのも、今後非常に大事かと思っております。

＜内田委員＞

産業経済分科会の内容を中心にお話をさせていただきたいと思います。

まず、資料１について、産業経済分科会の座長として取りまとめをさせていただきましたが、実際には、県民生活分野や県土基盤分野と重複する部分もかなりありました。

その上で、先ほど事務局から説明がありましたように、2040 年頃の社会経済の展望において、愛知県の産業経済分野は「アジアを中心とした世界のマーケットを取り込んでいく重要性」という方向でまとめていただきました。現在は、世界的に保護主義が台頭しておりますけれども、本

県のグローバル化の流れは加速していくと思います。

また、国内外の人材獲得競争というところに関して、昨年あたりからスタートアップの動きが愛知県や名古屋市、地元財界を中心に進展していますが、第４次産業革命でどこから付加価値が生まれてくるかわからない状況下では、極めて重要な取り組みと言えます。学生起業家も含めた人材の獲得という部分は強調していく必要があると思います。

将来像のたたき台として、「新たな挑戦」としていただいておりますが、まさに東海地方全体のリスクを取らない風土を変えていく必要があります。本県も堅実な県民性が定着していますが、その打破に向けても「新たな挑戦」というキーワードと「未来を拓く創造」というイノベーションが非常に重要になってきます。足元は順調ですが、首都圏だけでなく、福岡でのイノベーションの動きはスピードが速く、後発の本県としては、製造業を中心とした「産業集積を生かしたイノベーション創出社会を目指す」という方向性は妥当だと思います。

次に、資料３で気づいた点をお話します。５ページと６ページが産業経済分科会の項目です。

５ページの背景に、製造品出荷額等とともに農業産出額が全国８位とかなり上位であることが記されています。また、「取り組むべき政策の方向性イメージ」として、農林水産業の大規模化・スマート化の推進が記載されています。これに関して現在、例えばデンソーが若手の生産者と連携して、スマート農業に向けた取組を加速しています。自動車メーカーや部品メーカーのサポートを受ける形での農業の６次産業化や農商工連携といった、製造業との農業の連携に関する記述があってもいいと思います。

それから、若者や女性は農業分野への関心があっても、実際に新規就農はあまり進んでいないというのが現状です。地域別にみると、東三河の中山間地域や知多半島などの半島先端部といった地域では、男性農家の数に対して女性が少なかったり、女性があまり農業に興味を持たないという状況があります。従って、将来の少子化や晩婚化、未婚率の上昇を起因とする合計特殊出生率低下への対応として、地域ごとに男女間の人口バランスを取っていくという方向性の記述があってもいいのかなと思いました。

本県は、製造業の盛んな西三河地域でも、男性が多くて女性が転出超過という状況が続いていますが、東三河地域や知多半島など農業の盛んな地域でも、男女間の人口バランスを意識して、スマート農業による若者や女性の就農促進の可能性を書き込んでほしいと思います。

次に、６ページ目についてですが、世界とつながるグローバルネットワークづくりというところでは、製造業のマーケットとしてアジア市場がメインになってくると思います。アジア大会の意義について、分科会でも発言したのですが、製造業の「Made in Aichi」の製品の認知度や本県のブランド力の向上、観光分野のインバウンドの増加も重要度が高いと思います。アジア大会については、県土基盤分野の９ページ目に載ってはいますが、「スポーツを通じた交流」という範囲にとどまっています。製造業の主要マーケットはアジアですし、インバウンドもアジア市場がメインですので、産業経済分野としてもアジア大会の重要性に触れておいたほうがいいと思います。インバウンドでアジアのリピーターを獲得するというのは、製造業にとっても非常に重要で、アジア大会はその面でも大いに期待できると思います。

それから、分科会でも発言しましたが、８ページ目の県土基盤のところで、スマートシティという言葉とモビリティ先進県という言葉があります。その通りだと思いますが、スマートシティ

の大規模版の「スーパーシティ構想」が政府にあります。具体的には、大阪万博会場の夢洲を検討している可能性もありますが、政府にアピールする意味でも、本県でもスーパーシティというワードを入れた方がいいのかなとも思いました。愛知県でも常滑市の空港島でスーパーシティ構想の提案をしたかと思いますので、国へのアピールになるのであれば、その辺りも入れてもいいかもしれません。

最後に、資料４について、県全体の方向性を地域別に落とし込んでいるので全体的にはいいと思います。その中で、１ページの尾張地域のところで、名駅への比較的アクセス性が良い近郊都市に関して、衛星都市としての駅前周辺の再開発が進んでいて、駅からのコミュニティバスなどの交通ネットワークも整備されています。名駅のベッドタウンとして、コンパクトシティの整備が進んでいるような都市のイメージの表現があるといいのかなという印象を受けました。

＜奥野座長＞

以前、政府の事業で調べたことがありますが、東京大阪に比べて、愛知県の付加価値率は低いんです。付加価値総額も、出荷額も大きいのですが。そうすると、付加価値の高いものを作っていないということになります。製造品出荷額等が大きいだけでは良くないと思います。現在、改善されていれば、問題ないのですが。

また、農業は高付加価値化が必要ということで、元々、愛知県の農業は高付加価値だと思ってすが、農業の６次産業化に愛知県は非常に熱心だと感じています。具体的にはどういった意味があるのでしょうか。

＜事務局＞

農業の６次産業化は、一般的には、農業者の方が、単に農作物だけではなく、製品化や販売まで行うという意味です。１次産業２次産業３次産業を掛け合わせて６次産業という言葉を使っています。農業者の方が製品生産や販売をされている例もありますし、最近ですと、農家レストランということで、農家の方が実際に作った生産物をレストランで販売することで付加価値を高めるような動きも出ております。

＜奥野座長＞

愛知県の農産物や魚介類が、県内の、例えば名古屋のレストランで使われて、愛知県の中での付加価値になっているという、分業はどう評価されますか。全ての農家でレストランができるわけではないと思います。

＜事務局＞

もちろん、メインは分業タイプだと思います。農家の方の所得を増やすための１つの手法として、農産物をそのまま出荷するのではなく、付加価値を付ける、という意味での６次産業の取組だと考えております。

＜奥野座長＞

伊勢湾で獲れたフグを、下関ではなく県内で消費するというのが、県としての６次産業化だと思っています。

例えば北海道では、牛乳や魚などの原材料としての生産がメインで、多くの付加価値を本州が享受しているケースが多くあります。だから、北海道が、６次産業化して最終生産物まで作っていきたいということは理解できます。愛知県の場合は、三河で生産して、最終生産物は名古屋で消費しているので、付加価値は県内で享受できていると思います。愛知県の農家の所得は高いのではないでしょうか。

＜内田委員＞

渥美半島や知多半島などの近郊農業では所得が高い農家も多い状況です。

１次産業としての高付加価値化としては、例えば、デンソーの空調システムを応用してトマトの収穫量を上げる取組もありますし、ミニトマトに関しては、収穫ロボットを活用して深夜時間帯の収穫を自動化するような取組もあるようです。

＜奥野座長＞

１次産業自体の高付加価値化は正しいと思います。

＜内田委員＞

たしかに、２次産業については、愛知県の食品製造業の付加価値率は必ずしも高くなく、全国平均から少し低いと思います。付加価値率が高い県は、奈良や京都、高知などの観光地の自治体で、食品製造業の付加価値率を高めるためには、観光地の高価な土産品などの加工・販売も必要なのかなと思います。そういう点でも観光分野の重要性は高いと思います。

＜奥野座長＞

やはり分業が基本じゃないでしょうか。農家がレストランをするのは良いと思います。ただ、良い面があるのは否定しませんが、それを県の農業施策の基本に据えるべきかという疑問があります。愛知県と北海道とは、全然事情が違うように思います。６次産業化の意義について、もう少しわかりやすい記載があるといいと思います。

＜森川委員＞

資料３の全体のトーンへの要望として、４つ挙げたいと思います。

１点目は、スーパー・メガリージョンのセンターという項目がありますが、愛知県の全国の中におけるハブ性をもっと強調した方がいいと思います。愛知県では、３つの国土軸、東海道筋、中山道筋、南北のいわゆる昇龍道筋が交わっています。これは、日本の中で愛知県だけです。みんながここで交わる、このハブ性という愛知県だけの特徴を生かすことを、様々なところでアピールしてはいかがでしょうか。

例えば、Face to Face のコミュニケーションの重要さ、ＩＣＴでコミュニケーションできる面もありますが、Face to Face でないとイノベーションは起きにくいと思います。つまり、形

式知と暗黙知という概念がありまして、形式知はＩＣＴで交換可能ですが、暗黙知は Face to Face でなければ交換できません。こうしたところから、イノベーションが起きていくということです。ＩＴ人材を育成するという記載がありますが、ＩＴ人材やクリエイティブ人材を育成するのは、そんな簡単なことではありません。当面はハブ性を利用して、他地域から借りてくるという方向性でいいと思います。やがて、この地域に魅力があれば、こうした人材が定住し始めるという流れになると思います。

２点目は、分科会で何度も、村山委員も私も言いましたが、分散スマート型で地域づくりすべきという意見があまり反映されてないと思います。全国的に見ると、愛知は中心でハブですが、この地域にフォーカスすれば、もっと分散型の地域づくりをしていった方がいいのではないかという意見が、県土基盤分科会で何度も出たかと思います。単に分散するだけではなくて、当然、スマート化や、エネルギーも含めた地産地消化を推進していきます。国土交通省が提唱している「コンパクトプラスネットワーク」に反逆するわけではないのですが、愛知県は分散スマート型の地域づくりができる、数少ない地域ではないかと思っています。

３点目は、安心・安全で持続可能な地域づくりの関連です。この地域は、愛知万博の開催地ですから、もっと環境、持続可能性、ＳＤＧｓを強調してはいかがでしょうか。分科会の中では、グリーンインフラの活用という意見も出ました。それから、ＳＤＧｓに加えて、企業におけるＥＳＧ投資を活用してはどうかという意見もありました。ＥＳＧのＥ、Environment と、Ｓの Society があって、この Society、つまり社会貢献をするような企業をもっと優遇したり、褒めたたえていくべきだと思います。

４点目は、その社会貢献に関連して、私の考えですが、人生 100 年時代の働き方を愛知県から発信していくべきではないでしょうか。愛知県は、今、日本の経済エンジンになって、２次産業が盛んで働く場所がたくさんあるし、１次産業もすごく元気な地域です。その中で、70 歳 80 歳ぐらいまで、長く、細く働ける働き方も大切になってくると思います。

一方で、女性があまり活躍できてない地域で、その理由の１つとして、30 歳 40 歳ぐらいの子育て時代は仕事も子育ても忙しいということで、結婚や出産・子育てを諦める人もいるわけです。そこをもっと高齢者を活用して、働き方を平準化していって、70 歳、できれば 80 歳であっても、社会貢献型の働き方をすることによって、福祉的費用、介護的費用、医療的費用も、社会的に下がっていくような、一石二鳥、三鳥の状態を作り出していくべきだと思います。人生 100 年時代の働き方を、働く場所がたくさんある、この地域から作っていくということです。

そこに活力のある企業から、Environment と Society への貢献を引き出していくような政策を、県が打ち出していってはどうかと思います。

以上の４点を、様々なところで散りばめていただいたらいいかなと思います。

＜奥野座長＞

ありがとうございました。

ハブ性をもっと強調すべきだという点、全くそうだと思います。

スーパー・メガリージョンの西の拠点は、当面の間、名古屋だと言っていますが、こればかりではいけないと思います。色々なことを言っていくべきで、例えば中京新幹線があります。北陸

新幹線の小浜ルートは整備が進むとして、もう１本、米原－敦賀間を結ぶ中京新幹線を整備すればいいと思います。フル規格の新幹線を、敦賀から、米原または関ヶ原に通すことができれば、効果が大きいと思います。

＜森川委員＞

小浜ルートは関西主体に進めていただければいいと思いますが、奥野座長がおっしゃった敦賀－米原ルートですね。このルートに声を上げるのはこの地域、中経連や愛知県しかありません。私も色々なところで提案しているのですが、反対しているのはＪＲ東海で、北陸新幹線と東海道新幹線を相互乗り入れするには、電気系統などの改修に１兆円かかるということです。

それならば、北陸新幹線を米原まで延伸した上で、相互乗り入れをしなければいいと思います。そうすれば１兆円はかからないので、米原と敦賀の間の 40km を、たとえ単線でも作れば、ものすごく便利になります。北陸新幹線が小浜ルートだけだと、名古屋から金沢に行くことが非常に不便です。東海道新幹線で名古屋から米原まで行き、そこから 40km を在来線に乗って敦賀まで行き、今度は北陸新幹線に乗って金沢まで行くという、２回も乗り換えが発生します。中京圏と北陸圏をもっと結んでいくには、最善策ではないですがセカンドベストとして、北陸新幹線を米原まで延伸して、１回乗り換えで済ませるということは可能だと思います。やがて、新幹線の電気系統を更新する時期が来るので、そのタイミングで一挙に相互乗り入れを実現すればいいと思います。さらに、リニア中央新幹線が全線開通すれば、東海道新幹線の線路容量が余るので、大阪からも名古屋からも直通で北陸に行ける、という時代に結びつけばいいと思います。

＜奥野座長＞

ありがとうございました。かなり具体的なお話でした。

北陸地方は、全国で唯一、愛知・名古屋への期待を持っている地域だと感じています。他の地域から愛知・名古屋への期待に関する話はあまり出てきませんが、福井や石川からは、名古屋への期待が非常に強く出てきます。東京への期待度とは比べ物にならないかもしれませんが、それは非常に大事なことです。

それから、国土軸の話がありましたが、今、国の方では、新しい国土形成計画の議論を始めたところです。太平洋新国土軸の議論も出ていますが、いきなり（渥美半島－志摩半島間の）伊勢湾口の話はできません。それ以前に（和歌山－淡路島間の）紀淡海峡ができていません。私が、今注目しているのは、（大分－愛媛間の）豊予海峡です。第２国土軸として政府の方に話すと、理解を得られます。阪神淡路大震災で、山陽道が不通になった際、物流が停滞してしまいました。今は当時よりも物流が増えています。九州の東側の高速道路の整備が進んできていますし、四国の北側の高速道路も整備が進んでいます。これをもっと活用していくために、豊予海峡をトンネルか橋で結んで、九州から四国へのルートを作って、四国から山陽道に出る橋が３本ありますから、本州へのルートがあります。四国の北側の高速道路をさらに東に伸ばせば、紀淡海峡、伊勢湾口と結ばれていくことを期待しています。

先ほど森川委員が言われたとおり、愛知県は色々な軸が交わっているので、これは活用しなければならないと、私も強く思っています。

＜昇委員＞

最初に各論、最後に総論をお話しさせていただきたいと思います。

まず１つ目として、教育の話が出たんですけど、35 度超える猛暑日があって、小中学校にクーラーを付けなきゃいけないという話があって、遅ればせながら急速にやっているわけですけど、順番が逆だと思います。明治時代の日本は、教育立国ということもあって、家庭より学校の方が、少なくともハードは充実していました。だから、家庭から学校に行くと、少なくともハードはうれしいんですよ。

ところが今は、小学校のトイレが汚いから、トイレを我慢して家に帰ってうんちしている子がいるんですよ。少なくとも明治、大正、昭和の前半はそんなことなかったんですよ。家庭は水洗化されてなくても、学校の方がはるかに環境はいいんですよ。

やっぱりこれから情報社会とか、Society5.0 という話が出てくるんですけど、そのためには、学ばなくてはけないんですよね。その学ぶ環境が家庭より劣悪なんですよね。最低限、同じレベル、できれば家庭よりも教育環境の方が上だという、本来、日本はそうだったんですから、そういうふうに戻すべきだと思います。特に、これから人口が減るから、小中学校を統廃合するわけですよね。そのときに必ず、これをセットでやるべきです。統廃合する時に、今度、統合するところは非常にハードがよくて、いい環境で学べるようになると、住民説明会で説明しながら、それは、教育は、今までも大事だけども、これからもっと大事だということで、要するに考え方の基本、哲学、理念のところを変えていくことが必要なんじゃないかと思います。

２つ目に人口問題です。名古屋や東京は、まだ人口が増えるかもしれません。特に、東京は、若い女性が行きたがるから、増えると思います。農山村部は人口が減ってきたし、これからも減り続けると思います。第３のパターンとして、国土交通省が以前は発表してたのですが、限界集落度のナンバーワンというと、東京都新宿区の西戸山住宅なんです。要するにベットタウン、昔のニュータウンが、ものすごい限界集落なんです。なぜかというと、農山村の集落は、少ないけれども小学生、中学生、若い人、それからおじいちゃん、おばあちゃんが一応フルで揃っているんですよ。

ところが高蔵寺ニュータウンになると、例えば 40 年ぐらい前に、40 代の人が子どもを連れて入居してきて、それで子どもが、高校、大学出ると出ていくんですよ。それで、70 代 80 代 90 代のお父さん、お母さんだけが残っているんです。農村の過疎より、年齢構成でいうと、もっとひどいんですよ。

例えば、日進市なんかだと、マンション形式、アパート形式じゃなくて、一戸建てのニュータウンがあるんですよ。今 80 代、90 代しかいないんです。そうすると、電球の替えもできないんです。開発の 10 年後に入ってきた人はまだ 70 代だから、町内会が合併して、70 代の人が町内会長をやっています。それでも、後 10 年は無理かな、後５年くらいかなって言っているんです。

第３の類型として、いわゆるニュータウンっていうのがあって、そこがどういう構成になっていて、そこをどうすればよいのか。もちろん農村よりは、有利なところはあります。都会が近いですから、いろんな分野で自分の所にはなくても、近くの都会の都市機能を使えます。だから、農山村の問題とはまた別、もちろん都会の問題とも別なんです。ここで言うと「多様性を尊重す

る社会」とか、「豊かな時間を楽しみながら、すべての人が生涯にわたって活躍できる愛知」というのを、第３の類型として、かつてのニュータウンというのを１項目設けて、そこに住んでおられる方が生活を営むようにするには、どういうことが必要なのかっていうことを考えた方がいいんじゃないかなというふうに思います。

それから３つ目は、本当に細かいですけど、「ＣＡＳＥ」「ＭａａＳ」「ＳＤＧｓ」とか、略語がいっぱい出てきますので、最後の方に注釈を、中学生ぐらい高校生ぐらいでもわかるような言葉で付けていただきたいと思います。

最後、総論です。昨日、高山で話してきたんですが、中国人の方がいっぱいマスクしておられました。そのリスク管理は、後藤委員が言われたとおり、大切だと思います。グローバル化で人の交流が非常に多くなると、メリットもあれば、当然、デメリットもあるので、どういう地域づくりをするかというのは、両方踏まえてセットで考えなければいけないですね。

これからの話で、１つは産業構造がどうなるのか、労働力人口の減少をどう対応するのかという話はあるわけですけれども、例えば、これからＡＩとかロボットが普及すると言われています。そのときに、２段階あると思うんですね。例えば私、コンピューターの初期に、一生懸命コンピューター言語を学びましたが、今、全然いりません。多分、ＡＩとかそういうのも、発達が不十分なときには、ＡＩの動かし方とか、一生懸命学ばなきゃ行けない段階があって、でもそれを突き抜けてもっと発達すると、誰でも学習なしに使えるようになる段階が来ると思います。

だから、未来を予測する、2030 年、2040 年を見通すと、2030 年までは学ばなくてはいけない段階ですけど、2040 年はおそらく、もう学ばなくていい段階になっているんですね。例えば、国際交流で、今は英語を学ばなくてはいけないんですけど、2040 年だと、自動翻訳機がほぼ完全に使える段階で、無理して覚えなくても、そのまま使えるとかね。2040 年を展望すると言っても、2030 年頃と 2040 年で、かなり様相が違うのではないかと思います。

それで仕事を考えると、例えば、この Society5.0 っていうのがありますよね。これは狩猟社会、農業社会、工業社会、そして今の情報社会、そして Society5.0 ですよね。それで、今、労働人口が足りないって言われています。現に足りないから、女性、高齢者、外国人に一生懸命働いてもらっているんですけど、ＡＩやロボットが発達すれば、狩猟、農業、工業の時は、おそらく成人男性の力・肉体が必要だと思うんですけど、情報とか、Society5.0 になると、高齢者や女性であるということは、ほとんどのハンディでなくなるわけですよね。もっと言うと、2050 年以降なのかもしれないけれども、ロボットとかＡＩがやってくれて、人の労働力もいらないのかもしれないですよ。

これも妄想に近いんですけど、古代アテネ、ギリシャでどんなことをしていたかというと、市民は４分の１くらいしかいないんです。50％は奴隷で、４分の１は女性なんですよ。その４分の１の市民は、何をしていたかっていうと、１つは、直接民主ですから、政治ですよね。要するに、町内会みたくやっていたわけですよ。あとはアートで、要するに劇と音楽と絵画、それで仕事は女性とか奴隷がやってたわけですよ。

どこまで当たるかわからないですけど、本当にＡＩとかロボットとかが、本当に進化して完成形になったときには、人間はもしかしたら、あまり仕事してないかもしれません。今、我々はこの人口減少だとか、あるいは超高齢化を恐れているわけですよね。今の条件のもとで、人口減少、

超高齢化が進むと大変ですよね。だから今、一生懸命、労働力の確保対策をしているわけです。だけど、将来、ＡＩやロボットとかが完成形に近づいたら、人口が減少しても、生産力は落ちないかもしれないんですね。高齢者が多くても、むしろ高齢者は成熟しているし、戦争は滅多にしないですからね。若い人が多いところは、よく戦争するんですけど。今の話はなかなか、当たるも八卦的な要素もあるので、なかなか行政計画では使えないと思いますが。

でも要は、この社会の変化に伴って、2030 年レベル、2040 年レベル、場合によったら 2050 年レベルっていうのは、かなり違う様相が表れてきます。単純な直線回帰で、こういうふうに変化していきますと言う話ではなくて、変化の度合いによって、不連続な変化が訪れて、不連続な社会状況が訪れてくるかもしれません。そういう可能性もあるので、そういうことにも対応できるような幅を持たせた計画という考え方も大切に思います。もう１つは、５年、10 年ぐらいで見直すっていうことです。将来のことは誰もわからない、わからないけれども、多分そうなるんじゃないかなという、確率の高いもので、一応シナリオを書きますが、そのシナリオが唯一の可能性ではありません。別のシナリオもあり得るので、そういうことがあったときにも対応できるような考え方が必要だと思います。

それからもう１つは、今の話と絡みますが、もしかすると、１人２役、１人３役のような社会になるのかもしれません。社会の現象を、政治、経済、文化社会に分けると、さきほどのアテネは非常に政治、そして文化のアートに特化した社会ですよね。我々は働く方をメインに考えていて、あとは余暇です。でも、もしかすると、１人２役、３役で、仕事してお金を稼ぎながら、ＮＰＯや地域活動をやりながら、一方で、文化を楽しむというようなライフスタイルが、今は非常に限られた人しかできませんが、比較的多数がそれを望めば可能となる社会になってくることが望ましいと思います。

働いている人の満足度を調べると、日本は欧米に比べてかなり低いんです。経営学者の分析では、終身雇用と年功序列が影響しているんじゃないかと言われています。日本人は、１回入った会社を辞めてしまうと、いろんな面で経済的に不利になるんですね。辞めると、ちょっとランクが低いところになっていく場面が多くあります。それに比べると、欧米では、転職が多いので、今勤めているところの満足度は、欧米の方がはるかに高いです。終身雇用と年功序列が、社会の安定性にものすごく役割を果たしていることは、もちろん存じ上げている訳ですし、本人が望めば、終身雇用と年功序列であっても全然いいと思います。だけど、本人が望んだときには、他の会社に転職できて、そのことが決して不利にならない社会とか、今までずっと会社ばかりだったけど、時間の半分はＮＰＯに使いたい、時間の半分を企業に使いたいと、そういう生き方も選択できるような社会の方が、そうでない社会に比べて、一人ひとりの幸せ度や満足度が、おそらく上がります。私自身も色々な事情があって、中央官庁を辞めて大学にいますけれども、やっぱり女房から怒られています。日本の今の社会では、転職すると経済的にかなり損なんです。だから、みんな我慢しているんです。我慢しているから、満足度が低いんです。途中で変わる時に、制約になっていることを減らし、出来ればゼロにして、いろんな生き方が自由に選べるような社会の方が、幸せ度の高い社会になるのではないかと思います。

＜奥野座長＞

ありがとうございました。

学校の校舎の問題、私も全くその通りだと思います。これは日本が学校のハード整備に対して、あまり高い価値を置いてないっていうことではなくって、サイクルの問題かなと思っています。戦後 20 年、昭和 40 年から 50 年ぐらいまでの期間は、戦前の古い校舎の建替えを一生懸命やっていた時期で、それが 50 年ぐらいには、もう大方終了したんだと思うんです。

そこで何をやったかっていうと、１つはプール作ることを始めたと思います。今、それがお荷物みたいになっているようですが。

もう１つは、生涯教育を始めたんです。昭和 50 年代頃だと思うんですけど、今となっては、それは大事なことだとは思いますが、当時は、文部省はやることがなくなったんだと思いました。昇委員がおっしゃるように、ハード整備がそこで終わって、今、当時の施設が老朽化していると言うことではないかと思っています。今はクーラーの設置を、一生懸命やってらっしゃいますけど、これからまた次の建替えサイクルが始まるのかなとイメージしています。

＜クマーラ委員＞

前回は、海外出張と重なってしまい参加できなくて、大変申し訳ありませんでした。

まず、私としては最初に全体見てから感じたことと、具体的にちょっと気になっているところを、話をさせていただければというふうに思います。なるべく今まで話した先生方とは若干違うような形で話したいなというふうに思います。

日本という国は先進国として、今ハイテクなど積極的に取り入れながらの社会となりつつあるわけなんですが、でもやっぱりそのすべての中で忘れてはならないのは、人という側面であるわけです。

まず、資料１の体系イメージを見ても、ちょっと言葉で訴えた方がいいかなというのは、愛知県の将来ビジョンです。愛知県は、世界の中からだけではなく、日本の中でも知名度が低い地域であります。でも私はこの日本に来て、関西、関東に行って、今愛知の方にいるわけなんですが、やっぱり愛知ってのはすごく住みやすい地域なんです。ただ、住みやすいという言葉がどこかに出てきてもいいのかなと思います。

例えば、資料１に入れれば、真ん中の愛知の将来像のところで、豊かな時間で活躍できる住みやすい愛知のような言葉で、訴えてもいいのかなというふうに感じたわけです。

それから、「世界から選ばれる」というような言葉で、良いんだけれども、世界からだけでなくて、日本の中でもまだちょっと選ばれにくいところかなと、少し感じているわけです。外国人だけではなく、日本人を対象として考えても良いのではないかなというふうに思います。

あと、私が感じていることですが、すべて縦割りで見るんですよね。働くんだったら働くことしか注目しないし、生活やコミュニティというと、その部分しか注目しません。外国だと、それはもう全部一緒になるわけですよね。働きながら、その地域社会のことも考えます。そのところが、日本的ということではあるかもしれませんが、その辺りを少し考え直してもいいかなと思います。

２つ目としては、やはりグローバル化への対応を、今まで以上に考えるべきだと思います。グローバル化対応ということになると、外国人をイメージされるとすごく感じています。確かにそ

の通りでもあるんですが、今、私が仕事上で、新しい学部設置に向けて取り組んでいまして、私どもが考えているのは、日本人の若者がグローバル化対応できないと、この社会はもう持続できないということです。それで、いろんな実験をやってみて、ちょうど今年が完成年度となるわけなんですが、すごく成功したかなと自分としては感じてるわけです。

というのは、若者に能力はあるんだけれども、それをどうやって伸ばすのか、グローバル化対応できるように育てるプログラムを作れば、間違いなくそれに乗っていける能力、可能性が充分あるということです。

３つ目としては、先ほども若干申し上げましたけれど、企業と社会を別々に考えるのではなくて、一体のものだと考えるべきだと思います。企業というのは、ものづくりだけではなく、様々な組織体も含めてのことであるんですが、例えば、資料のいろんなとこで言うと女性のことや、あるいは高齢者のこと、あるいは外国人のことが、それぞれ出てくるわけなんですが、働くことを考えた時には、働くことしか見ない。

外国であれば、例えば学校でも、一定の期間、授業の中でボランティア活動への参加が義務付けられています。企業でも、今は社会的責任という言葉で話題にされていますが、従業員にも、社会に仕事以外のところで貢献できるような仕組みづくりがあれば、良いのではないかなというふうに考えます。

というのは、定年延長や、女性がより活躍するようになると、地域社会の担い手がいないのではないかと懸念されるところがありますが、それこそ働く人の特徴に応じた形の働き方と同時に、地域社会との連携のあり方を考えていければ、十分、今まで以上に、地域や個人が生き生きといられるようになるんではないかと思います。

例えば、何にも仕事も収入もなく、地域でボランティア活動しろと言われた時のその個人の対応と、生き生きと働いている時に同じことを期待された時には、もちろん時間の制約あるけれどそれをうまく調整することができれば、より貢献できるものがあるのではないかなと思います。

４つ目は、外国人住民の話です。この地域社会で彼らがどういう行動をとるかということを考えてみますと、若者であれば学ぶことです。ある程度の生産、労働年齢になりますと、働くこと、それから同時に、地域で生活するという軸も出てくるわけです。

年齢で見ると子供から年寄りまであるわけですが、性別を見ると男性女性、全て見てみますと、やはり企業側からは、彼らに働いてもらうことしか見ていません。特に、しばらく前は、外国人労働者の問題の中では、企業は仕事をしてもらうけれども、社会でいろんな問題起こしている点は一切見ない、というふうな過去があります。今では認識が違ってきているかと思いますが、やはり以前も申し上げた通り、この地域で住みながら様々な活動を行うということに注目して、その活躍の場を提供するべきだと思います。

また、外国人の場合には、日本の中でずっと住んでいる人とは違って、様々な違いというものがあります。その違いの中では、言語の問題や文化の問題、文化の中ではその宗教とか、食文化とか、生活習慣とか様々なものがあるわけですけれども、そういうあたりも、日本にいるときにはここまでこういうところは我慢しなければいけない、という言い方もあるかもしれません。しかし、そうすると、地域に対するイメージも評価も悪くはなるわけですし、郷に入りては郷に従え、ということわざがありますが、今の時代はグローバル化社会であることを考えると、ある程

度、多様性を認めることも考えるべきかなと思います。

それから、もう１つはやはり、愛知の特徴ということであれば、産業、企業とか製造業とかあるわけです。中でも自動車産業は、世界的にも有名であり、経済活性化、あるいは労働力人口をここに集めるために、すごく大きく貢献してることには間違いないけれど、もう少し危機感も感じて欲しいなと思うんですね。何かというと、ＥＶ、電気自動車です。そういう時代になると、組立て産業を日本で必ずやるべきかどうかということを問われた時に、その必要性があるのかというのは、これから疑問に思うべきだと思います。危機感を感じるべき時代になるかなと思うんですね。今は途上国でも、組立て産業としての自動車生産が始まっている時代です。低価格でもできているわけです。インドだとか、私が生まれたスリランカでも自動車組立てをしています。質の高い部品を海外から輸入して組み立てています。

逆に言いますと、部品産業が、とても性能が高い部品の製造・供給という形で、世界との連携を図ることのほうが、これから日本社会に大変重要になるのかなと思います。

全体としてはそういうことですが、あと資料で少し具体的に何点かご紹介させていただきたいと思います。

まず資料１ですが、これからの日本の真ん中にある、またはハブという言葉で、我々が考えるときに日本国内でも海外においても、まだ認知度といいますか、魅力はそれほど感じていません。しかし、先ほども言いましたけれど、すごく過ごしやすく住みやすい地域ということを、どうやって発信するのかということです。子育てしやすいところ、あるいは共働きがしやすいところ、家族として住みやすいところ、今よく話題とされている言葉ですと、外国人だけでも生活しやすいところなどを元にした、情報発信は結構良いのではないかなと思います。生活環境なんかは、関東関西と比べると、もう断トツこちらの方が豊かですよね。

それから、もう１つは、資料全般に「外国人」という言葉が出てくるんですが、これはもしかすると、外国籍住民という言葉に置き換えた方がよいのではないかなというふうな感じがしますね。

それから資料２の右側、「世界から選ばれる魅力的で・・・」と書いてあるところですが、この地域に人が来てもらうこと考えた場合、他の地域とは差別化を考えた方がいいかなと思います。私から見るとやっぱり非常に広い、豊か、余裕のある生活ができるということ、これは外国人から見ると、すごく魅力的かなと感じます。

私は途上国出身ではあるんですが、生まれたところでは 10 部屋ぐらいあって、子ども一人ひとりが自分の部屋を持っているようなところなんですが、これは東京、関西では中々手に入れることはできないです。しかし、この地域だったらできるんじゃないかと思います。

過疎化っていうのは、住む場所を選ぶときにも、やっぱり仕事の合間、様々な変化の中で、必ずしも事務所で仕事するということでなくて、遠隔でもあるいはフレックスタイムとか、テレワークという言葉も出てくるんですが、様々な可能性を考えた場合には、この地域はより住みやすいところとしての魅力発信が可能な地域かと思います。

資料２で、自動車産業の話は出てくるけれども、先ほど申し上げた通り、部品にも力を入れることによって、新しい市場開拓を目指してはどうかと思います。それから空き家・空き地対策の場合でも、先ほど言ったように、外国人の受け入れを念頭にした対策があっても良いのかなと思

います。

資料３で、１ページでは、取り組むべき政策の方向性イメージの中で、「性別や人種・・・」と書いてあるんですが、性別は必要なのか、性別はなくてもいいのかなと感じました。代わりに、多様性という言葉の前に、宗教などの多様性を入れてもよいのかなと感じました。あと、項目の順番を入れ替えたほうがいいかなという感じがします。「学校教育において・・・」が先で、その次に、「外国人や障害がある人・・・」と入れ替えた方が良いかなと感じます。また、「外国人」は「外国籍住民」の方が良いと思います。単なる外国人という言葉よりも、働いて住む、あるいは学ぶという時には、外国籍住民という言葉に考え直した方が良いかなと感じました。

あと、「外国人に対するライフスタイルに応じた支援」というところですが、支援と同時に、コミュニケーションを図る仕組みの構築も必要かなと思います。どういうものを望んでいるのかを確認するためには、ＮＰＯが中心になってるところはあるけれども、外国人の方と直接交流する、コミュニケーションをとる仕組みの構築が必要ではなかろうかと思います。

また、外国人や地域社会の人々、それから若者や大学生などの地域社会への貢献、活躍、そういうものを奨励するような仕組みがあるべきと思います。

あともう１つ、これは愛知県だけでできることではないと思うんですが、休暇の取得について、ゴールデンウィークなどの国民の休日が日本にはあるんですが、もうちょっと柔軟に休みがとれるような形になると、働きやすさ、住みやすさも、向上されるのではないかと考えられます。

＜奥野委員＞

ありがとうございました。

住みやすいという言葉を入れることは、クマーラ委員のお話は全部分かるんだけど、私は反対です。日本は、どこも住みやすい街って言っているんです。それから住みやすい街って言ったところで、何の情報にもなりません。住みやすい都市名古屋、愛知と言っても、日本の他地域と比べた際のアピールとしては弱いと思います。おっしゃることはよくわかるんだけどね。

ひとあたりご意見いただきまして、私からも簡単にポイントだけお話しします。

前回も言いましたが、目標としては安全と豊かさ、成長の活力、存在感とありますが、存在感をどう発揮していくかだと思います。

私も全国を色々と周って、話をしたり聞いたりするんだけども、愛知・名古屋が出てくるっていうことはまずありません。大体東京、それからときどき大阪です。３月にフランスのカンヌで、都市計画と不動産関係の、世界中から人が集まる大会があって、１時間ほどの講演を頼まれて行きました。向こうから来る資料は全部、東京、大阪、名古屋の順番で書かれています。私は全部、東京、名古屋、大阪に直しました。最近は聞きませんが、一時期、愛知県もコマーシャルを流していましたね。いかがわしいことでもいいから、もっと存在感を出さないといけない。

それから、２番目のスタートアップについて、県は重要と位置付けていますが、愛知県や名古屋市が取り組んでこなかったわけではありません。ところが、どんどん存在感が他都市と比べると遅れてきています。何もやってなかったわけじゃなくて、やってきたのにそうだから、今からやられても難しいと思うんです。

それで、何をやればいいかと言うと、なぜ遅れたかを分析しなければなりません。スタートア

ップをやりたい理由は、貧困でどうしようもないからやりたい。それから、ものすごくお金や社会的地位が欲しいからやりたい。こういう時に、やるんだろうけどね。愛知県には、良い就職口が色々あって、そこそこ頑張れば、経済的に良い生活はできるんです。その中で、そんな苦労しようとは思わないし、親も許しません。その辺の背景はどうするか。

日本がＮＰＯでボランティアのバックアップから始めたときに、韓国はソーシャルビジネスに早くから取り組んできたんです。日本は遅れて、ソーシャルビジネスに入っていきます。ソウルの市長と一緒に研究をやったことがありますが、韓国では大学を出たって、働き口がありません。特に良い大学に行かないと意味がないんです。だから、ソーシャルビジネスを始める土壌があったんです。でも、成功している人はそんなにいません。

イノベーションについて、どこから付加価値が生まれるかわからないと森川委員からお話がありましたが、その通りです。最近は減ってきたと思うけど、イノベーションと言うと、工学部の支援を、愛知県も名古屋市もずっとやってきましたが、私はそれを批判しました。最近は出てこなくなりましたが、それでもそれらしいことをやりたいという雰囲気を色々な文章で感じることがあるんです。

知の拠点という事業をやっていますが、それは、知を大事にする雰囲気が、その都市にあるかどうかが大事です。名古屋大学に本気で芸術学部を作りたいと考えていました。県立芸術大学を名古屋大学に組み入れたくて、図面を作成することまでしました。県立芸術大学は、今も活躍されているので良いのですが、名古屋大学が世界的大学になるために必要なものは、人文社会科学、芸術だと思います。

それから、「モノづくり」と言っておけばいいんじゃないかという雰囲気が、愛知県の皆さんにあって、その中身や問題点を分析していません。10 年前に、モノづくりと言っているときには、付加価値の高い製造業というプライドを持って言っていました。以前は、英語で話すときには、Manufactural Industry とは決して言わず、Monozukuri と言っていたんです。今は、製造業とモノづくりを一緒の意味で使っていますが、製造業と言うのは誤解を生むんです。中学で習う、産業構造のペティ＝クラークの法則があってね、産業は発達すると１次から２次、３次へとなっていくという法則です。

愛知県は、製造業の付加価値や賃金が遅れています。モノづくりという言葉は、もう少しプライドを持ってきちんと使わないといけません。非常に気になります。

各委員からのご意見（２巡目）

＜内田委員＞

先ほどクマーラ委員からお話があった、生活しやすい、住みやすいとのご指摘ですが、これに関しては、私も奥野座長と同じ意見で、全体に反映するのは難しいのではないかと感じています。たしかに、特定のターゲットに対しては、具体的には、この地域で生まれ育った人や、子どもさんのいるようなファミリー層、または地方出身者などは、生活しやすい、住みやすいというのは売りになるんですが、これから必要になってくるイノベーション人材に関しては、むしろマイナスである可能性が高いと思います。これからは、起業家精神を持った若者や女性、スタートアップ企業は数を追求する時代で、その中から大企業にまで成長していく企業が数％出てくる社会

になっていくと思います。

先ほど、昇委員からも、女性は都会が好きだという、まさに東京一極集中の本質をついた意見がありましたが、本県も刺激があるまちへ変貌していく必要性があります。ナイトタイムエコノミーも含めて、生活しやすい、住みやすい部分はデメリットにもなり得るということを、県民の意識も含めて変えていく必要があるのかなと思います。さらに、数多くのチャンスがあって、仮に失敗しても受け入れられるような土壌や地域性を醸成していくことも不可欠だと思います。

それから、奥野座長からご発言がありましたが、やはり観光情報が少ないと思います。観光都市のブランディングが、スタートアップも含めた企業立地や、将来的な定住人口の増加に大きく影響すると思います。その面では、東京・大阪に明らかに劣っている部分なのかなという気がしています。これも分科会で話しましたが、あまり反映はされていないようですので少しご検討いただければと思います。

最後にもう１点ですが、「安全・安心な持続可能な地域づくり」のところで、防災力・防犯力の維持向上というところがありまして、ちょっと細かいですが、スマートシティによる防犯力の強化という要素も少し入れるといいのかと思います。地域防犯とか啓発活動とか、そういう従来型の防犯力強化しか書かれていませんので、本県は最先端技術を活用した安心・安全なまちづくりを進めていく方向性もあるということを記述してもいいのかなと思います。

＜森川委員＞

魅力づくりのところで、県土をもう少し客観的に見ていくと、愛知県はものすごく魅力があるのは、１つは、伊勢湾と三河湾があるということ、知多半島と渥美半島の二つの半島があって、それから必ずしも愛知県じゃないですけど、３つの大きな河川、木曽三川があります。この辺の魅力をアップしたり、アピールすることがすごく大事だと思います。

あと、離島があるんです。日間賀島、篠島、佐久島。これが、例えば離島めぐりをしようと思っても、日間賀島と篠島は南知多町にあるから、師崎とかあの辺から出ているが、佐久島は西尾市にあるから、あっちには船は行かないですね。どうしてもっと海上ネットワークをつなげないんだろうかと思います。あと、伊勢湾、三河湾の本気の浄化です。それをすることによって半島の魅力が上がる。

それから、三重県ともっとその辺をタイアップして、伊勢湾なんて幅は狭いですから、本当にプレジャーボートに乗っても、三重県側に行けるし、もちろん答志島とか伊勢志摩の方に魅力的なところがある。これはやっぱり県が主導して、この辺の海、川、半島の魅力をアップしてアピールすべきじゃないかと思います。

＜クマーラ委員＞

２点申し上げたいと思います。

１つは、やはり、この地域に対するイメージ、特に外国人の立場あるいは日本の中でも同じなんですが、それほど高くないということには変わりはないと思うんです。でも、やはり、ここの特徴というのは、産業ということには間違いないわけです。その意味では、観光という活動から見て、産業観光とか、従来型のままというだけではなく、もう少しこれに力を入れるようなこと

があってもよいのではないかと思います。
　２つ目は、過疎地域とかのことが出てくるんですが、都会と、いわゆる農村との関係で、グリーンツーリズム的な辺りを売り物にできるのではないかと思います。

＜後藤委員＞
　先ほどクマーラ委員がおっしゃったように、縦割りっていう話があります。これはもう散々言われていて、よく私たちは行政の縦割りをなくしてくださいって言うんですが、私たち一人ひとりの中にもあります。日本的に謙譲の美徳みたいなことで、他の人の役割に侵入しないとか、他の人を立てるとか、そういう気持ちがあって、ついつい自分に与えられた役割のところだけ発言するとか、あるいは行動するとかっていうようなところがあります。これからの時代、個人レベルにおいて、あるいは組織人の一人として、他の人や組織のところにもきちっと発言したり行動したりして、そのことが相乗効果によって、自分にとっても相手にとっても組織にとっても良くなるんだよっていうことをもっとしっかり言っていく必要があると改めて思いました。
　確かに外国とか行ってみると、２人で話していても、別の人が勝手にコミュニケーションの中に入って来て、ワーッてしゃべるんです。私どもは、２人で話している人を見て、知っている人でも、今あの２人で話しているから割り込んでじゃいけないと思って、サーっと通り過ぎてしまうところがあると思います。この資料の中にも、例えば県民生活のところでは、一人複役社会というキーワードが書いてあるのですが、そういうことが、例えば男性の方も、女性に対して、昔でしたら女性の台所に入っちゃいけないみたいなことがあったと思います。それは今、若い世代の方ではなくなったんですが、年配の人はまだそういうのがあることから見てもわかります。企業の中でも、地域社会の中でも、もっと乗り入れるということを、そしてコミュニケーションするということが非常に大事だっていうことを、学校教育なり、いろんなところで語っていくことが大事かなと思います。
　それから奥野座長から、やはり愛知県は実質的にはいろいろ力を持っているにも関わらず、日本国内で他のところから愛知・名古屋って言葉が出てくることがないっていうのは、私も本当によく感じるんです。これはやっぱり、愛知県とか名古屋の雰囲気というのが、先ほどのことも絡んでくるんですけど、広報しないというか、あまり目立つようなこと、例えば、愛知がいいよ、名古屋がいいよ、ということを言わない、あるいは地域の中で、三河がいいよ、尾張がいいよ、みたいなことを言い合わない。やはり個人にそれを任せているだけですと難しいと思いますので、行政自らが愛知県とか名古屋の魅力をどんどん語っていくとか、県民、市民に対してもそういうことを語ってくれる人達を、どんどん引き上げていくようなことをしていくことがこの地域の魅力発信のためにも非常に重要だと思っています。外国籍住民というか、そういう方々にも、どんどん愛知や名古屋にいいところを語ってもらって、それを伝えていくことが重要ではないかと思いました。

＜奥野座長＞
　ＳＤＧｓの話をすると、こんなことやっていない役所はあり得ません。日本で唯一意味があるとすれば、縦割りではなく、横串を刺して話をしないといけないと言っているという点だと思い

ます。ＳＤＧｓのロゴマークを書いているだけで議論は許されるような風潮は、どうかと思います。

＜昇委員＞

１つはですね、今の後藤委員やクマーラ委員の話にもありましたけど、外国人ではなく外国籍住民である、なるほどと思ったんですが、うちの大学でも、自閉症の子とかアスペルガーの子とかいて、授業のときにどう対応するかということを思っておりました。考えてみると、20 世紀はそもそもそういう病気を知らない、それが今一般化してきて、そうすると全体として、インクルージョンですね。エクスクルージョン、排斥するのではなくて、いろんな人を包摂していくんです。包摂って言葉が硬いので、もうちょっといい大和言葉とか日本語訳があればいいんですが、なんかそういうのが、どことなくトーンとして全体に、こういろんなタイプの人とか、自然とかインクルージョンして、それが結局自分達にとって豊かな生活になるようなトーンが伝わるようになっていると、難しいんですけど、いいかなということです。

もう１点は、これはもう内容についてのお願いですが、世界から選ばれる魅力的ということは、世界から選ばれようとしているわけです。でしたら、世界と比較した方がいいのではないかと思います。例えば、名古屋が、ソウル、釜山と比べて、どういうところが優れていて、どういうところが劣っているのか。それは、シンガポール、香港、上海と比べて、というようなことを、少しは芽出ししてもいいのかなと思います。東京、大阪と比べるのもいいんですが、それだけじゃなくて、グローバル化する中で、アジアの中で、世界の中で、愛知・名古屋がどういう魅力があって、どういうところが魅力がないのか。さっきから出ている、国内で、例えば、東京でも大阪でも札幌でも博多でも、観光地として魅力があるじゃないかというのは、国内的にもそうなんですが、多分国際的にもそうなんです。そういう意味でいうと、例えばパリは、ものすごい観光都市ですよね。ニューヨークも、ものすごい観光都市ですよね、シンガポールだって観光都市ですよね。ですから、もちろん国内と比較しても意味があるんですが、国内と比較するだけではなくて、海外と比較すると、問題点がより浮き彫りになるように思います。なかなかデータを取りにくいので、もちろん完全な比較はできないと思いますが、とりあえずこういう計画で、初めて国際都市や地域と、愛知・名古屋を比較して、今はできなくても、次の計画では、もうちょっとちゃんとした形で、東京、大阪との比較はもちろんやるけれども、それだけじゃなくて、アジアの中で、世界の中で、愛知・名古屋は今はこうで、それをどうしていきたいということが、計画の中に謳われていると説得力が増すのではないかと思います。

＜奥野座長＞

おっしゃるとおりだと思いますね。競争っていうのは、国と国じゃなくて、都市と都市、今はメガリージョン同士の競争になっている。愛知県もそうだし、名古屋市もそうなんだけど、３番目と言っていると何もしなくてもいいんです。東京と大阪のやることを見て、計画を作っています。評価するときは、市であれば他の政令市で比較して、上回っていれば二重丸つけている。それでは都市間競争になりません。パリとかニューヨークとかと比べてどうなのか、中国のメガリージョンと比べてどうなのか、そういうことを見ていかないといけません。

子育てでも、支援策をいっぱい並べておいて、幼稚園が足りたとか、足りないとか、毎年出して、二重丸つけています。私が関心を持っているのは、最終的には、出生率の上昇にどう結びついていくのかということです。東京や大阪と同じようなことができていればいいという評価になっていて、それはやってはいけないことだと思います。